

## ゴー！ 医見 vol.273 マスクと面会制限

5月24日に京都で開催された、「病院・施設の面会制限を考える」というシンポジウムに参加しました。面会制限によって生じる弊害、マスク装着のバカバカしさについて議論されました。

### ルールだから

内科医の端くれというニックネームで、Xでも積極的に情報を発信している先生が講演されました。ご自分の奥様のお母様が癌の末期で秋田県の緩和ケア病棟に入院していたのですが、お孫さん、つまり、先生のお子さんは面会できませんでした。理由は「ルールだから」。この病院はアニマルセラピーを行っており、犬は病棟に入れるのに、です。「うちの子は犬よりも汚いということですか？」と尋ねたら、「お孫さんは幼稚園に通っているから、そこで感染症を拾ってくるかもしれない」という答えが返ってきたそうです。笑っちゃうのは、外出と言う形で自宅で会うのであれば、孫どころか、親戚や知人との面会もOKだ、というのです。「おかしくないですか？」と突っ込むと、「ルールですから」と答えるそうです。「1分1秒でも長く会っていたい」という気持ちを踏みにじるような組織には緩和ケアを名乗る資格はありません。診療報酬の加算もはく奪するべきです。

### 岩井一也先生

静岡市立静岡病院の内科医、岩井一也先生もお話されました。この先生もXで積極的に情報発信をしておられます。先生は病院の感染対策委員でもあったのですが、当初から科学的根拠に基づいて「マスクに感染効果はない」ということを訴えられ、病院職員を説得されました。その結果、いち早くマスク装着の要請を中止し、面会制限も解除されました。それでもその後の感染状況等は厳しい制限を続けている病院と変わりなく、どちらかというとも良いくらいだ、と言われました。

岩井先生が素晴らしいのは、同病院の成果を科学的根拠を示して積極的に情報発信をされたことです。その成果で、静岡県内ではマスク不要、面会制限解除の病院が増えているということです。

### 高浜医師会員へのアンケート

高浜医師会の先生方にマスク装着についてのアンケートを実施しました。その結果、マスクをつけている理由は全員が「周りをつけているから」と答えました。どのような状況になったら患者さんや業者さんにマスク装着を求めなくしますか？という問いにも「周りの医療機関がそうしたら」との答えがほとんどでした。あまりに日本的な、そしてあまりに予想通りの結果で、笑うしかありませんよね。

### 悪魔の言いなり？

医療機関や高齢者施設は「厚労省がマスク装着を推奨しているから」という言い訳をします。でも、よく考えてみてください。厚労省のトップはコロナワクチンで2000人以上の人が亡くなっても「重大な懸念事項はない」と言っているような、悪魔に支配された大臣ですよ。そんな組織の「推奨」に羊の群れのように従う、というのは滅茶苦茶恥ずかしいと思わないのでしょうか？悪魔の推奨に従うということは悪魔の手下とみなされても仕方ありません。

### 救いの手

本当はマスクや面会制限なんてやめたい、だけど周りの目が怖い、厚労省に逆らいたくない、という思いの医療・介護の関係者が大勢おられると思います。でも、大丈夫です。近いうちに岩井先生をお招きします。そして、悪魔の呪縛からの救いの手を差し伸べていただきます。

つばさクリニック院長 石川 亨

## 訪問診療よもやま話

過日、新型コロナワクチン後遺症の方の訪問診療に同行する機会がありました。年齢もお若く、社会においても家庭生活においても一番力の発揮できる、輝ける日常がワクチン接種によって一変しました。

「なんていうこと…」

それが正直な気持ちです。同情ではなく、できることはどんなことでもしてさしあげたいと

いう思いに駆られました。様々な症状や思い通りにいかない日々の暮らしに辛い思いをしていらっしやることに加えて、世間では理解してもらえない辛さ、診療拒否の話まで聞かれます。もし、自分の親が、子が、そんな状況にあったとしたら看過できることではありません。

ワクチン後遺症の症状は数えきれない程あり、その症状が複雑に絡み合っているとも聞きます。幾つもの不調を抱えながら”心の病気”とスルーされてしまう虚しさを思うと、医療の在り方にも疑問を感じます。患者さまを支えるご家族の皆さんのご苦勞も並大抵ではないと想像します。

介護はもちろんのこと、日々回復への手だてを模索したり、心中穏やかにはいかない日々をお過ごしの中、当院がお役に立てることがあればこんな嬉しいことはありません。仏教用語で「同行二人」という言葉があります。ひとりでは辛く寂しい道程も誰かが一緒に歩いてくれたら喜びは倍に、辛さは半分になります。当院はそんなクリニックでありたいと願っています。

(看護師 石川 薫)